

仏、慈氏に告げたまわく、もし衆生ありて、疑惑心をもつてもろもろの功德を修して、かの国に生まれんと願ぜん。仏智・不思議智・不可称智・大乘広智・無等無倫最上勝智を了らずして、この諸智において疑惑して信ぜず。しかもなお罪福を信じて、善本を修習して、その国に生まれんと願ぜん。このもろもろの衆生、かの宮殿に生まれて、寿五百歳、常に仏を見たとまつらず、経法を聞かず、菩薩・声聞・聖衆を見ず。このゆえにかの国土にはこれを胎生という。(『真宗聖典』三二八頁)

第16組 好藏寺住職

「罪福を信じて、善本を修習する」(1)

両瀬 涉

text by Wataru Ryose

「ヨブ記」

「ヨブ記」(旧約聖書)は、すべての宗教に於いて「信心(信仰)とはどういうことなのか」を問いかける重要な文学です(『聖書』、日本聖書協会、七七五―八三三頁参照)。

ヨブは神をして「地上に彼ほどの者はいまい。無垢な正しい人で、神を畏れ、悪を避けて生きている」と言わしめる、倫理・道徳的な生活につとめ、平穏で豊かな生活を送っていました。そこへサタン(悪魔)が現れ、神に「ヨブが利益もないのに神を敬うでしょうか?」と囁きます。そして、神の許しをえてヨブに様々な不幸な出来事を起こします。飼っていた羊が奪われ羊飼いが殺され、火事で家が焼かれ子や孫が焼死します。更に自分の身体全体が皮膚病になってしまいます。ヨブ自身は、こうした苦難を受けるに値する罪を犯した覚えは全くないので納得できません。生きる意味を見失い、神の存在すら疑いながらも、神からの直接の答えを求めようとするのです。

因果応報

そこへヨブの友人達が現れ、自分が気づいていないだけで何らかの悪(=罪)なる行為をしているのであり、身に覚えがないという傲慢なヨブを非難します。また、こうした思いがけない苦難は“神の教育的配慮”であることを忠告し、神に対する謙虚な姿勢を取るよう説得します。しかし、ヨブはそうしたことを受け入れようとはしません。ヨブの友人達は神に対して極めて謙虚で真摯な

態度を保っていますが、その根拠は、苦難は罰であり、幸福は報償であるという「因果応報」の観念によるものです。(並木浩一著『「ヨブ記」論集成』、教文館、一五〇―一五二頁参照)。

宗祖は「第十九願」を展開するなかで、この「因果応報」の観念を「罪福信」ということで問題提議しています(『真宗聖典』、三二八頁)。「善本を修習して」とは、善なる行為(=念仏)をするよう努力するということです。そうすれば、善い報いがもたらされる。また逆に、悪なる行為をすれば、悪い報いがもたらされる。つまり「努力は報われる」ということと、悪いことをしたら「バチが当たる」ということを何となく信じている。不幸な苦難というべきことが起きたとき、胸に手を当てて思い当たることはありませんか、と問われればバチが当たったのかと思知り、また努力が報われるということに関して言えば、良い結果に至るまでの努力がまだまだ足りないのだと納得する。苦難をこのように解釈することは、一見まじめで謙虚な姿勢に見えます。

人間の解釈

因果応報という観念は、起こった現実を経験測によって、人間が合理的に解釈しようと努力することです。そこには「努力は報われる」という“期待”と、「バチが当たる」という“不安”が常につきまといます。期待と不安という、不確かなものを根拠にして、本当の真実を見ることができるとか、と宗祖は問いかけているのだと思います。

「ヨブ記」においては、最後に神が登場し、「私が大地を据えたとき、お前はどこにいたのか。知っていたというなら理解していることを言ってみよ。・・・知識もないのに、言葉を重ねて神の経緯を暗くするとは」とヨブを非難します。さらに神は、“因果応報”の議論をしたヨブの友人達を、「お前たちは、わたしについてわたしの僕ヨブのように正しく語らなかつた」と非難しました。ヨブは神の言葉を受け入れ、「わたしには理解できず、わたしの智恵を超えた驚くべき業をあげつらっていました」と平伏するのです。

宗教(=真実の教え)は、「努力は報われる」とか、「バチが当たる」などといった、身勝手な都合がへばりついた一面的な道德のような「人間の解釈」を超えたものであり、だからこそ私たち人間は、その教えを学ばなくてはならないのです。